

質的研究

I. KJ 法の紹介

II. 質的研究手法を用いた英語教育に関する研究の論文紹介

I. KJ 法

(『外国語教育研究ハンドブック』(第18章 “KJ 法入門” p.258-284))

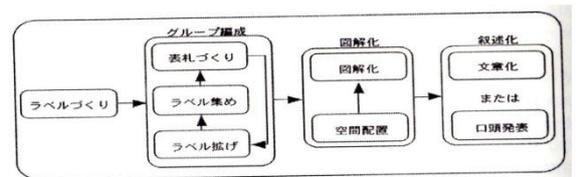
1. KJ 法の概略

- KJ 法：民族地理学者川喜多二郎による発想法。1951年に雛形が誕生
 - 特徴：質的データから仮説を生成・学習者の実態を詳細に述・学習・クラスの問題点・解決法を発見することに有効
- 利点：専門用語を用いない為、分析者、読み手にとって分かりやすい

2. 分析手順：

A. ラベル作り→B. グループ編成→C. 図解化→D. 叙述化

- データ：
 - ・ 大学生の英語の授業の感想と授業への取り組みに対する自己評価を自由記述形式
 - ・ 授業：外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーションクラス
 - ・ 60名中14名の記述



▲図18-2 KJ法の大まかな手順（川喜田，1997より）

A. ラベル作り

名刺程度の大きさのカードにデータを転記する。1枚のラベルへのデータ量は1つのメッセージ性（意味のかたまり）とし、4文程度まで。

誰の記述か分かるよう通し番号をつけることが重要

B. グループ編成

小さいグループから最終的に3つ程度(最高10個程度)の大きなグループに絞り込む

①ラベル拡げ：ラベルをランダムに並べる

②ラベル集め

内容の「志（こころざし）」が近いものをセットする。ラベル集めは小さなグループから作成。

ex) “なんか友達同士で英会話するのは、恥ずかしいと感じた”

“ドラマや映画では口語は多いので、表現が難しく感じた”

→授業に関するネガティブな志

仲間が見つからないラベルは「一匹狼」と呼ばれ、個の情報として活かす。(統計との違い)

③表札作り

方法：核融合法

1. 全体感の把握：順番に並べる
2. 殺し文句の作成：各ラベルの志の核心を表現
3. 家庭懇談会：殺し文句のみを見て、キーワードを新しいラベルに記入。
4. 短歌作り：文による要約(表札)を作る。
5. 化粧直し：表札のたたき台の補足・訂正・短縮をする
6. 清書化：化粧直しでできた表札を新しいラベルに清書

| 元ラベル | 殺し文句 | 点メモ | |
|-------------|---------------------|------|--------|
| K3 【裏返し】 | 日本人同士の 英会話は恥ずかしい | とまどう | やりにくい |
| | | 違和感 | |
| K7 【裏返し】 | 口語表現が ピンとこない | 難しい | 習っていない |
| | | 慣れない | |

▲図 18-6 家庭懇談会でのラベル・殺し文句・点メモの配置

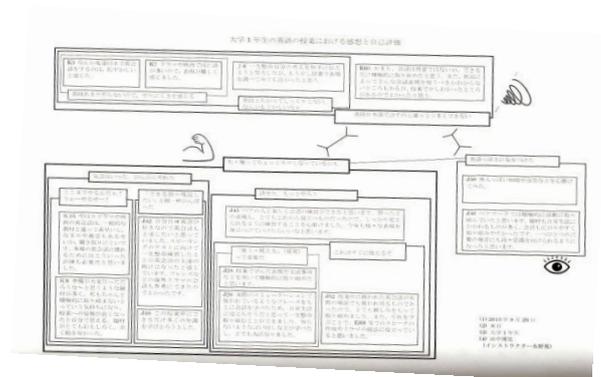
④グループ編成:小グループと一匹オオカミをグループに編成する

C. 図解化

1. 空間配置：最終的に残ったラベルの束だけを使い、解釈しやすい順番に配置する。

→大枠が決定

2. 束をばらし、それぞれの表札をグループ化(「島どり」)し、関係性を明記。各島を表すシンボルと記入。



D. 叙述化(論文中の結果の箇所)

- ①図解から分かった内容を忠実に説明する場合と、
- ②分かったことから新たな発想へ前進していく場合の2種類。

3. KJ法の留意点

- 1) 対象は言語データ
- 2) データに基づいた発想：データに根ざした主観
- 3) 目的相関性:研究目的と相関的に意思決定する
- 4) プロセスを明記:分析者の思考を明示化する

II. 質的研究手法を用いた論文紹介

1. Yabukoshi, T. & Takeuchi, O. (2006). Exploring language learning strategies used by Japanese junior high school students of EFL: A qualitative approach. *Language Education & Technology*, 43, 39-56.

- 研究課題：1.日本人中学生が用いる学習方略を記述する。2.生徒と教師の方略使用の認識を比較する
3. 日本人中学生の方略使用を検証する質問紙を作成する。
- 研究対象：中学校の生徒
- 参加者：付属中学の生徒 347 名、教師 23 名
- 研究手法：エスノグラフィー (?)
- データ収集法：学習法に関する自由記述式質問紙と、メタ認知に関する多肢選択式質問紙
- データ収集時期：2004 年 2 学期中に、教師が生徒に質問紙を配布。教師に関しては、直接またはメールで質問紙配布。

■ データ分析： KJ 法

1. 回答を読み、方略に関する記述を抜粋し、カードに記入。
2. グループ化してグループ名をつける
3. 各グループの数を数え、数量化する
(第3者がデータの一部を分析し、主観性を確認)

- 結果：7110 の記述カードを 4 つの方略グループに分類し、各グループを数量化。
アンケート回答の結果は、例記述を含めて報告

2. Miyazato, K. (2009). Power-sharing between NS and NNS teachers: linguistically powerful AETs vs. culturally powerful JTEs. *JALT Journal*, 31(1), 35-62.

- 研究課題：ALT と JTE の Team teaching (TT) の関係性。教師間の力配分に焦点を当てた。
- 研究対象：公立高校 2 校
- 参加者：2 組の AET と JTE
- 研究手法：事例研究(Case Study)
- データ収集法：naturalistic study。15 時間の観察、フィールドノート、JTE と AET への面接。(AET: 計 9 時間, JTE: 計 5.5 時間)。録音し、書き起こし。
補足として生徒 16 名へ TT に関するインタビュー。
- データ収集時期：2003 年 9 月～2004 年 5 月 (9 か月間)。1 か月に 2 回の授業
- データ分析：内容分析。AET と JTE それぞれを、言語・社会文化などに分類して、例(インタビュー結果)を提示しながら分析。
- 目的：TT の関係性の多様性を理解するために、ケーススタディーの必要性がある。

3. Polio, C. G. & Duff, P. A. (1994). Teachers' language use in university foreign language classrooms: A qualitative analysis of English and target language alternation. *The Modern Language Journal*, 78(3), 313-326.

- 研究課題：教師はいつ英語（生徒の母語）を用いるか。どのような機能を果たすか。
- 研究対象：外国語を学ぶ大学生 6 クラス（各クラス 5-23 名）
- 参加者：Native 教師
- 研究手法：エスノグラフィー(?)
- データ収集法：授業観察、教師への英語使用に関するインタビュー
- データ収集時期：10 週間の授業
- データ分析：内容分析。(書きおこし後、カテゴリー化)
10 週間の授業のうち、英語を用いた授業を行った 6 クラスの 2 回目の授業の内容を分析
- その他：
 - 質的研究にした理由：先行文献など基にカテゴリーごとに事前に分類してからでなく、記述を基に分類をすることの必要性を感じたため。
 - 結果を昨日、使用言語の難易度、生徒との関わりへの効果にカテゴリー化し、それぞれの解説を例と共に提示。